



*Very Short*

&

*Super Long*



1 クワガタにチョップしたら死んだ  
(インストゥルメンタル)

## 2 【急募】この状況から助かる方法

待って

一分だけでいいので状況を聞いてください  
何も見えないとだろうけど私ピンチなんです

さっき1000の大蛇に飲まれて胃の中にいるんだけど  
その蛇が□□に攫われそうらしくてのたうち回ってます  
あと胃の中に疫病のゴリラもいて暴れ回ってるし  
その動きが□寄せの術の印になって続々餓鬼が湧きます  
一応救助の人が来たけど別の時代の自分っぽくて  
会うとタイムパラドックスが起きて宇宙が崩壊するんです  
そもそも私闇金で借りた金競馬で溶かしたとこだし  
あと今の若い世代って年金がろくに貰えないっぼいです

ここから助かる方法はありませんか？  
なぜかここに□□だけはあるんで連絡ください

## 3 骨肉のコント

妹「お父さん……うう、お父さん……」

姉「いい加減泣きやみなさい」

妹「姉さん……。だって、お父さんが……」

姉「あんな人のために泣かなくていい。死んでせいせいしたくらいよ」

妹「姉さん！なんてこと言うの！」

姉「あの人が一度でも父親らしいことをしたことがあった？ 私たちのことはまる

で無視して、遊び歩いては母さんを泣かせたじゃない」

妹「でも、昔は優しくかったでしょう？ 確かに会社が成功してからお父さんはおかし

くなってしまったけど……」

姉「お金は人を狂わせるのね。あの人の取り柄はお金だけだったわ」

妹「そんなのひどいよ姉さん……」

姉「……さあ、私たちもお金の話をしましょう。これがあの人が残した遺書よ。遺産

の分配についてでしょうね」

妹「遺産なんて……そんなものは……」

姉「いいからもらっておきなさい。慰謝料みたいなものよ。……でも、あの人のこと

だから下手すれば隠し子が何人もいるかもしれない。私たちですんなり二等分

できるといいんだけど」

妹「か、隠し子……？」

姉「中を改めましょう。……ちよっと待ってて。封筒を切るハサミを取ってくる」

妹「……ふふふ、バカな姉さん。お父さんにあんなに反抗的だった姉さんとずっと

良い子ちゃんを演じていた私が二等分なわけないじゃない。お父さんはきつと

私の方にたっぷり残してくれるはず。それに……隠し子ですって？ 今更何を言

揃いも揃って悲しい事故に遭っているなんて」

姉「お待たせ。じゃあ開けましょうか」

妹「うん」

姉「読むよ。えっと……。『私の死後、私の財産は下記に定めた通り分配する。長女、

妹「……え？」

姉「……隠し子いなかったのね」

妹「私もないんだけど！」

今は亡き父の意志

残された遺書はあまりにも不平等

争いは避けられない

いざ骨肉の争いへ

妹「ねえ私のことは!?」  
姉「か、書かれてない!」  
妹「そんなはずないよ! 見せて!」  
姉「必死ね。あなたさっき『遺産なんて』って言ってたじゃない」  
妹「あっ! で、でも、いくらなんでも何にもないのはひどいよ。私のことはどこに……あ! あった! 裏側に!」  
姉「え!? 何であるのよ!」  
妹「あつていいの! ほらココ! えっと、『長女は相続した財産で次女にワサ〇ーフを4袋買ってやること』。はあ!? ワサ〇ーフ!? 安いにも程があるでしょ!」  
姉「コンビニ行こっか」  
妹「行かないよ!」  
姉「まあまあ落ち着いて。素直に従いましょうよ」  
妹「従えないよ! お父さんの全財産って、60億くらいあるんだよ!?」  
姉「マジ!? やった!」  
妹「喜ばないですよ! 1人で受け継ぐには大きすぎるんじゃない? 半分でも莫大なお金だよ?」  
姉「え? ……あなた、半分取りに来てない? 興味なさそうだったのに」  
妹「だ、だって、お父さんを嫌っていた姉さんが相続するのは納得いかないし……」  
姉「ねえ、覚えてる? 昔父さんと遊園地に行った時のこと……」  
妹「急にそっちのスタンス取らないですよ! さっき『父親らしいことしてくれなかった』って言ってたじゃん!」  
姉「本当に惜しい人を亡くしたわね……」  
妹「私は認めないから! 私は姉さんと違って会社も手伝ってたのに!」  
姉「そういえばあなたは会社を受け継ぐんだから別に遺産なんかなくても困らないじゃない」  
妹「遺産の大部分は会社の株なの! ってことは会社も姉さんのものってことに……」  
姉「私社長になれるの!? ようし、私に逆らったらクビね♡」  
妹「すごいなこの人!」  
姉「もう諦めなさいよ。この遺書はちゃんと専門家に依頼して作ってあるんだから。逆らうことはできないの」  
妹「今までの努力が水の泡だ……」  
姉「さ、早くコンビニ行こっか」  
妹「ワサ〇ーフはいらない! ああもう! 遺書もう一回見せて!」  
姉「めちゃくちゃ必死じゃん……」  
妹「あっ!」  
姉「どうしたの?」  
妹「……姉さん、遺書にはこう書いてあるね。『私が所有する全財産』って」  
姉「それがどうしたの?」  
妹「棺の中の父さんを見たでしょ? ……お父さんは、手ぶらだった!」  
姉「いや、所有ってそういうことじゃないでしょ! 棺の中では人は大体手ぶらだよ!」  
妹「パンツくらいは履いてるでしょ!」  
姉「死体からパンツ剥ぎとれたの!?」  
妹「この遺書ではパンツ以外の財産については指定されていないことになる!」  
姉「なら他の財産は二等分が妥当! パンツは姉さんが独り占めしていいから!」  
妹「妥当じゃない! パンツもいらない!」  
姉「これ以上グダグダ言うなら本当にクビにするよ!」  
妹「私はクビになったって構わないもん」  
姉「え?」  
妹「あの会社は私で持っていたようなものなの。どうしてお父さんの会社が急成長したかわかる? ……私が邪魔者を消してきたからよ!」  
姉「まさかそこまで怖いとは……!」  
妹「私がいなくなれば会社の株価は確実に暴落するよ。姉さんが相続する遺産はただの負の遺産になるでしょうね」  
姉「あの手この手を使ってくる……!」  
妹「地獄に突き落としてやる!」  
姉「あんなに良い子だった妹が! ……まあでも、あなたが辞める前に株売っちゃえばいい話よね」  
妹「そこまでして遺産が欲しいの!? 守銭奴め!」  
姉「あなたには言われたくない!」  
妹「もう……どうすりゃいいの……? 封筒貸して! 他にも何か入ってるかもしれないし」  
姉「もう諦めたら?」  
妹「あっ!」  
姉「どうしたの?」

今は亡き父の意志  
残された遺書にはまだ続きがあるの  
何であれ負けられない  
いざ骨肉の争いへ

妹「えっと、『1枚目に書かれている内容は嘘だ。『本当は二等分が良かったが……もし1枚目を読んで長女が素直に受け入れ、かつ次女が抗議した場合、どっちも普段の行動と違いすぎて信用ならない。よって、私の所有する財産は全て慈善団体に寄付する。』」

姉「はあ!？」  
妹「ちなみに、この封筒には盗聴器が仕掛けられており、遺書の作成を依頼した弁護士が2人の会話を聞いている。』」

姉「ええ!？」  
妹「ね、姉さん……」

姉「やばい……。今までの全部聞かれてたってこと?」

妹「……………姉さん! いやー、今日も見事に決まったね! 私たちが作ったシヨ

ートコント『姉妹喧嘩』」

姉「……………あー、そうね! 迫真の演技だったじゃない!」

妹「姉さんこそ! あの切り替わりっぷりはキングオブコントでも通用するよ!」

2人「はい!」  
♪ジャンガジャンガジャンガジャンガジャンガジャンガジャンガジャン

妹「……………無理かな」

姉「無理ね。あなたに至っては逮捕されるんじゃない?」

妹「か、肝心なことは言っていないし、この弁護士を抱き込めば……。あっ!」

姉「どうしたの?」

妹「……………弁護士さん。聞いているんでしょ? あなたもそれなりの依頼料をもら

っているんでしょ? が、それだけで満足ですか? 10億ほどお支払いしたら黙っ

てもらえますか?」

姉「この子本当に怖い……。でも今はそれが頼もしい……………」

妹「ですが弁護士として依頼を受けた手前、内容を無視するわけにはいかないで

しょう。だからこの遺書は忠実に守ります」

姉「え!? どういうこと!? それじゃ……………」

妹「ただし、『私の所有する全財産』の解釈を変えた上でね。姉さん、棺の中の父さ

んは?」

姉「手ぶら! せいぜいあるとしたらパンツ!」

妹「そう! 全財産! パンツとした上で遺書を忠実に守れば、残った遺産は私たち

のものだし、弁護士さんも業務上問題なし!」

姉「随分やばい遺書を残した父親ってことになるわね……………」

妹「お父さんは『自分が履いているパンツを半分に分けて姉妹に分配したくて、

それが叶わないならそのパンツを慈善団体に寄付したかった人』ということに

なるね……………」

姉「頭おかしいじゃない!」

妹「あんなクソ親父がどうなるうと構わないでしょ?」

姉「案の定あなたもそう思ってたのね」

妹「このままじゃ2人とも何ももらえないんだし、協力しようよ姉さん」

姉「ええ。本来の財産は弁護士への口止め料を引いた後で二等分ってことでいい?」

妹「もちろん。じゃあ、遺書を見返してみよう。1枚目は姉さんに全財産、つまり

パンツを相続させた上で……………その財産で私にワサ〇ーフを4袋買う」

姉「ムズ……………」

妹「コンビニに行く?」

姉「無理でしょ! 死体が履いている古ぼけたパンツでワサ〇ーフは買えない!」

妹「あんなに安っぽく思えたワサ〇ーフがとつもない高級品に感じる……………」

姉「あ、でも、1枚目は守らなくてもいいんでしょ? 1枚目を私が受け入れて、

あなたが抗議したってことにすれば」

妹「それだと姉さんが『死体のパンツでワサ〇ーフを買う』ことを受け入れた人」

ってことになるけど」

姉「私も頭おかしいな!」

妹「流石に同情する……………」

姉「あなただっとうしてもパンツが欲しくてごねた人ってことになるじゃん」

妹「最悪……………」

姉「めげずに2枚目の方を確認しましょう」

妹「うん、えっと……………、『パンツは慈善団体に寄付する。』……………」

姉「こっちもムズ……………」  
妹「あ、でもこれも解釈次第だよ! お父さんはどこに寄付するかを明記してないから、……………私たちが慈善団体を作ってそこに寄付するだけでいいかも」

姉「なるほど！でもパンツを欲しがる慈善団体って何？」  
妹「『パンツの人権を守る会』……？」  
姉「いや、パンツに人権はないでしょ！」  
妹「でもそれくらいイカれた団体じゃなきゃおかしいよ。姉さん、一緒に作ろう？」  
姉「し、仕方ないわね。苦勞も二等分ってことで。」  
妹「ありがとう姉さん。これで私たち大富豪だね。世間の目は冷たいだろうけど……」  
姉「……皮肉なものね。あの人がお金でおかしくなってしまった気持ち、今ならわかる気がするわ」

#### 4 鈍色の空から

冬枯れの街並みは  
あなたなしでは色もなく  
吹き荒ぶ冷えた風  
運ぶのは孤独だけ  
悴んだ手は何も掴めず  
頼りなく震えている私に  
重い鈍色の空から降り注いだ  
マジで長いタオル  
マジで長いタオル

#### 5 六花監督は脚本家に逃げられました

……あーもう、何度電話しても繋がらない。一体どうしてくれるんだあの脚本家。映画の撮影期間中に逃げるなんて。この映画一体どうやってまとめるつもりだったのよ！

明日が撮影最終日なのに、何を撮るかも決まってる。こうなったら監督の私が考えるしかない。一度設定とこれまで撮ってきたシーンを見直そう。

まずは主人公の早苗。サッカー部のマネージャーをしている高校二年生。そして早苗を取り巻く双子の龍一と龍二。この三人の三角関係を描いた青春映画だ。

龍一はサッカー部のエースで成績も優秀。誰にでも分け隔てなく気さくに接する爽やかな男。学校中の女子に注目されながらも一途に早苗を想い続けている。

弟の龍二は軽音楽部に所属。しかしどうしてもギターを持ち上げられず誰もバンドを組んでくれない。やがれた龍二は毎日ネットニュースのコメント欄で芸能人の悪口を書いて憂さを晴らしている。早苗のことが好きで、龍一の悪口を吹き込むことで相対的に上に立とうとするという嫌なアプローチで攻めている。もちろんガツリ拒絶されている。あと、たびたび早苗の上履きを盗んでいる。でも代わりに新品を置いておくのでノーカンだと考えている。

そして先週までの撮影で龍二がついに名誉毀損で訴えられて警察に呼び出されたところまで撮り終わっている。……ここから先の脚本はできていない。

でも、最終的に早苗が龍二とくっつくシーンを撮影済み。

埋められない穴 不可解な着地点

残された私が背負う命運

見えない 見えない でも探し出すの

隠されたゴールへの道

監督として！

……何があったの早苗！ここから逆転とかあり得るの？この間を埋めるなんて一体どうすればいいの!?

どうせ脚本家はもういないんだし、いっそオチを変えて龍一とくっつくことにしちゃおうかな？うん、絶対その方がいい。龍二とくっついても誰も納得しないよ。最後に早苗の頭が突然おかしくなるホラー映画になっちゃう。

……あっ、ダメだ！明日の撮影最終日には早苗役の女優が来ないんだった！

早苗が出てくるシーンはもう撮れない！龍二とくっつくオチしかもうあり得ないんだ！

本当にどうするつもりだったのあの脚本家？どう考えても早苗が龍一を差し置いて龍二に走るの是不自然……。

あ、じゃあ龍二をもっと魅力的なキャラクターとして作り直せばいいんじゃない？明日しかないとはいえ追加シーンを撮影できるし、今まで撮ったシーンも削ればいいだけだもん。えっと……撮影済みの龍二のシーンは……。

シーン6. 龍二が「これでも叩いとけ」と渡されたカスタネットを窓に投げつけちゃって全校集会で叱られるシーン。

シーン8. 龍二が早苗の下駄箱を物色しているところを早苗に見られ「臭くねえか確かめてやっただけだ！」と逆ギレするシーン。

シーン11. 龍二が龍一のオナラの回数をカウントした結果を早苗に「E田してブロックされるシーン」。

シーン14……。

ダメだ！こいつ登場するたびロクなことしてない！カットしていったら存在ごと消えちゃう！早苗が龍一を突然見限ってぼっと出の弟とぐつつくシナリオになっちゃうよ。うーん、散々龍一といい感じになっておいてそれじゃ早苗の見え方が悪いかな……。

じゃあ、龍二の悪行を削るのはほどほどにして、ちらほら登場はさせよう。それで龍二の良いシーンを追加して何とか悪いイメージを帳消しにしていけば……、あー、それも無理！何を成し遂げれば帳消しになるのこんなの！

と何か何なの早苗！序盤でブロックしてる相手とぐつつかないでよ！本当はアンタがこの話の一番のガンなんだよ!? アンタが意味の分からない選択をしなければ龍二もヤバイサブキャラってだけで済んだのに！

……あ、それならいっそ早苗をイカれた趣味のアンポンタンとして描き直すってのはどう？ そうすれば最後の馬鹿げた選択も早苗らしい判断ということに……。

あ、違う。早苗のシーンはもう撮り直せないんだった。え？ というか、早苗がもう出られないんだとしたら、これから早苗が龍二に惹かれていくシーンも撮れないってこと？ 早苗がいない場面で早苗が龍二を好きにならなきゃいけないの？ じゃあもう詰んでるよこれ！

それでも何とか完成させなきゃ……。早苗も龍二もいじれないなら、龍一をいじってのはどう？

龍一が……実は龍二よりヤバイ奴だったことが発覚するシーンを撮って……、絶望して自暴自棄になった早苗が龍二とぐつついてしまうという……バッドエンドにする……とか。観ていて気持ちの良い映画じゃないけど話の筋だけは通るはず。

一応撮影済みのラストシーンを確認してみよう。このシナリオで上手く繋がるような台詞回しだといんだけど……。

シーン313. 龍二の告白の台詞が「お前の靴、口に含んでも大丈夫な程度には臭くなかったぜ。気に入った。付き合ってるで、早苗の回答が「嬉しい。私も本当は龍二のことが好き」。そのまま2人はキスをして——やめて早苗！ その口にチューしちゃだめ！

何だこれ!? 前後の繋がりとか抜きにしてこの告白シーン単体で観てもひどくない!? 何で早苗はこの告白が嬉しいの!? あー、でも！ さっき考えた「自暴自棄になった早苗が龍二とぐつついてしまう」というシナリオなら逆にこのシーンは生きるかもしれない！ 早苗完全に自暴自棄になるもん！

えっと……じゃあ、龍一が何らかのヤバイことをして……、それが学校中の噂になり……、絶望した早苗は学校に来なくなった。これで告白シーンまで早苗が登場しないことにも説明がつく。よし、あとは龍一を龍二以上のクソ人間に仕立て上げるシーンさえあれば……。

ないわそんなの！ 相手はあの龍二だよ!? 無差別殺人くらいやらなきゃ勝てる相手じゃない！ 大体龍一に関しては散々かっこいいシーンを撮ってきたんだからちょっとやそつとじゃ印象を覆せないし！

じゃあせめてかっこいいシーンは全部削って……、いや、そうしたらやっぱり存在ごとなくなってしまう！ この映画から龍一がいなくなったら龍二がただただ気持ち悪いことばかりやり続けた挙句最後に何故か彼女ができるっていう奇怪な映画になっちゃう！ 誰が観たいのそんなの！

龍一の株を落とすのも無理となると……。龍一は優秀なモテ男のままで、早苗に絶望を与えなきゃいけない……。そんなの一体どうすれば……。

そうだ。龍一はいい男だけど、それでもどうしても付き合うことはできないという事情があるとしたら？

早苗は龍一のことを好きでも諦めなければならぬ事情がある。だから早苗は絶望して自暴自棄となり、反動で龍二と付き合ってしまう。これなら上手く繋がるかも？ ……どうしても付き合えない事情？

埋められない穴 不可解な着地点  
けど見えてきた希望 繋がったストーリーライン  
腕き足掻き ただ探し出すの  
隠されたゴールへの道  
監督として！

どうする？ 早苗のシーンはもう撮れないわけだから、すでに撮影済みの映像の中でその事情とやらを描写しないといけないんだけど……。  
あ、じゃあ……、CGを使って……龍一をどうしようもないほど毛深いゴリラか何かにして……種族の違いで付き合うのは憚られるという設定に……。でも龍一ってモテモテって設定だから、学校中の女子がどうしようもないほど毛深いゴリラに注目しているという異様な世界観になっちゃうな。

あ、そもそも、龍二と付き合うくらいなら毛深いゴリラの方がマシかな？ うん、マシだわ。早苗は頭はおかしいけど人を見た目で判断するタイプではないし。だって自分の下駄箱を物色していた龍二と同じ顔をした双子の兄を好きになるくらいなんだから……。

そうだ！ 龍一と龍二は双子！ 演じている役者も本物の双子！ ってことは……龍一を龍二に、龍二を龍一にすり替えることができるんじゃない？！

何らかの事情で2人は入れ替わって過ごしていたってことにしよう。その事情を描くシーンは早苗の役者がいなくても撮影できるし、最後に早苗と龍二とくっつくのも自然。これで全部解決じゃん！

えっと、龍二が警察に連行されて正式に身元を調べたられたところ、実はそっちが龍一だったと発覚する。そして今まで龍一を名乗っていた龍二がついに早苗に告白する。これで綺麗に繋が……。

だ、ダメだ！ 龍二は告白のとき早苗の靴を口に含んでるんだった！ そもそも告白のシーンは単体でもおかしいんだよ！ これじゃ双子のヤバイ方は靴を盗み、まともだと思ってた方も盗んだ靴を借りて口に含んでいたことになるじゃん！ どっちも頭おかしいしそれで喜ぶ早苗もイカれてる！

……よし、決めた。私も逃げよう。

## 6 メロスは激怒した。だからカニを与えた。

メロスは激怒した。

必ずかの邪智暴虐の王を除かねばならぬと決意した。

メロスには政治がわからぬ。

メロスは村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮らしてきた。

けれども邪悪とカニに対しては人一倍敏感だった。

だからカニを与えた。すると、メロスは感嘆の声を漏らし、

怒りを忘れ、踊り狂った！

カニカニカニカニ

メロスはカニが大好き

カニカニカニカニ

メロスはカニが大好き

走れメロス 走れ 走れ 走れ

走れって

## 7 法廷かき混ぜ人

弁護士「大丈夫です！ 私が必ず無罪を勝ち取ります！……ここの話、この裁判に勝

つたらポーナスが貰えるんですよ。それを見越してもう色々とローン組んじ

ゃったんで絶対負けられないんですよね。……フフ、とにかく自分を追い込ん

で頑張ってるので！ 私に任せてください！」

車買っちゃった白くて綺麗なの 早く納車されないかな

休み取って海岸沿いをドライブするの

被告は窃盗の疑いをかけられてるけど

絶対やってないって言ってるし大丈夫勝てるでしょ

検事「では、この辺りで話をまとめましょう。被害者の蔵から発見された足跡は被告人が所有している靴と一致していました。そして扉に付着していた指紋も被告人と一致しています。さらに、現場に落ちていた布片も被告人が着ていた服と同じ繊維だったのです。もはや疑いはないでしょう。数々の骨董品を盗んだ犯人は、被告人で間違いありません。検察側からは以上です。」

弁護士「完全にやらかした……！」  
そりゃこんなの勝つたらボーナス出るわ  
こいつ絶対やってんじゃん  
結果的に私の生活費も盗んでる  
どうする？車だけならまだしも  
エグいパソコンも買った  
勝たなきゃ終わり 勝たなきゃ終わり  
もやしも食べられない

検事「ど、どうしたの弁護士人？」

弁護士「ローン払えないって……！」

検事「何を言ってるの？反論があるなら言ってみなさい」

弁護士「い、異議あり……！」

検事「フン、何かしら？」

弁護士「もうちょっと考えます……」

検事「フッフッフ、待ってあげましょう」

弁護士「い、異議あり……！」

検事「何？」

弁護士「もうちょっと考えます……」

検事「早くして。どうせ結果は同じなんだから」

弁護士「い、異議あり……！」

検事「言ってみなさい」

弁護士「もうちょっと考えます……」

検事「いい加減にして！かなり待ってるけど？」

弁護士「証拠って足跡と指紋と布片の三つでしたっけ？」

検事「そうだけど？」

弁護士「えー？三つもあるのズルくないですか？」

検事「ズルいとかそういうんじゃない！問拔けな被告人が三つも残したんだからし  
ようがないでしょ！」

弁護士「あんま被告人のこと悪く言わないでくださいよ」

検事「検事ってそういうもんなの！あなたが庇えばいいの！」

弁護士「でもこんな庇いようがないですか？」

検事「じゃあもう終わろうよ!？」

弁護士「それは困ります……」

検事「そうは言ってもこんなの足跡の一つだけでも一発だし——」

弁護士「足跡がダメってことなら、被告人は飛べるってのはどうです!？」

検事「いや、どうと言われても……」

弁護士「飛べる人間がわざわざ足跡残すはずないでもんね。……よし。無罪無罪」

検事「何バカなこと言ってるの。飛べる人間なんているはずないでしょ」

弁護士「いるかもしれないじゃないですか！そうやってマイノリティーの人たちを  
無視しちゃいけない!？」

検事「攻め方間違ってるよ！悪あがきはやめなさい！」

弁護士「裁判長！検察側は人格に問題があるので被告人を無罪にしてあげた方がいい  
と思います！」

検事「裁判長！弁護士側は手詰まりになり私への個人攻撃を始めました！もう潮時か  
と思います！」

弁護士「待ってください！せめて被告人が空を飛べるかどうかの確認を行うべきだ  
と思います！」

検事「分かったじゃあ飛んでみて！」

弁護士「やっぱやめるべきだと思います！」

検事「本当は飛べないって気づいてるでしょ!？」

弁護士「でも被告人って学生の時クラスで浮いてたっぽい雰囲気だから浮けるって  
ことで良くないですか？」

検事「裁判長！いよいよ被告人へも個人攻撃を始めました！もう錯乱状態っぽい  
で判決に行ってしまうでしょう!？」

弁護士「あ、でも先程の検察の発言に対してまだ言いたいことが！「本当は飛べない  
て気づいてる」という部分なんです」

検事「何？何か問題ある？」

弁護士「なんか」"God"の歌詞っぽくないですか？」

検事「だから何なの!？あなた今のとこまともな発言一つもしてないよ!？」



そりやまともにやったって勝てないでしょ  
せて時間を稼がなきゃ  
糸口を見つけ出すまで粘るべし  
証拠は三つも残ってるけど  
つつけば隙もあるでしょう  
頑張れ私 頑張れ私  
負けたらマジで詰む

弁護士「現場に落ちていた布片ですが、世の中に同じ服はたくさんあるわけで被告人  
が着ていたものと断じるのは早計ではありませんか？」

検事「急に真面目にやるじゃん！でもその感じだよ！」

弁護士「ありがとうございます！」

検事「ただ布片には被告人の汗がついていることが確認されてるのよね」

弁護士「頑張ってる！」

検事「ごめんね！でも法廷で頑張るのがあなたの仕事！」

弁護士「じゃあ……えっと……あっ！」

検事「個人攻撃はなしだよ？」

弁護士「ええ？じゃあ……あっ！」

検事「作り話もなしだよ？」

弁護士「じゃあもうないよ！」

検事「裁判長！終わりましょう！」

弁護士「あっ、そうだ、被告人って露出狂の変態なので服とか着るはずないんですよ！」

検事「個人攻撃で作り話じゃない!?それはそれで捕まるし！」

弁護士「いえ、彼が露出狂の変態である証拠は提出されていないので捕まりはしない  
はずですよ」

検事「いや、彼が露出狂の変態である証拠がないと困るのはそっちだよ？」

弁護士「何その状況!？」

検事「知らないよ！あなたが作ったんですよ!？」

弁護士「とにかく彼は日頃から裸で過ごしてる人なんです！現場に布片が残るはず  
がありません！」

検事「今まさに裸じゃないけど？」

弁護士「……裁判中に裸とかいう下品な言葉を使うのは最低だと思いまーす！」

検事「お願いだから事件の内容でかかってきて！」

弁護士「もう検事側のイメージを下げるしか活路がない……!？」

検事「そんなもん活路じゃない！変な難癖つけてこないで！」

弁護士「こんなもん決まりきってるんだから難癖つけるしかないでしょ！」

検事「弁護士は絶対になんか言うな！」

弁護士「と、とにかく下品な言葉を訂正してください！」

検事「ああもう、じゃあ……、彼は今まさに生まれたままの姿ではないので露出狂の  
変態とは認め——」

弁護士「誰しもが生まれた時には服を着ていないと考えるのはマイノリティーへの  
配慮に欠けていると思いまーす！」

検事「SDGsやめろー！」

弁護士「聞きました皆さん!?この人、この時世に『SDGsやめろー!』って言いました  
よ!？」

検事「いや切り取ったらそうだけと文脈ってあるでしょ!？生まれた時に服着てる  
人なんかいないんだからこの話終わり！」

弁護士「生まれつきテンガロンハットを被っていた人だっているかもしれないじゃな  
いですかー！」

検事「なんでよりにもよってテンガロンハットなの！」

弁護士「そんなのテンガロンハッターの人たちが一番思ってますよ！」

検事「そういう人たちテンガロンハッターって言うの!？」

弁護士「とにかく検察側は……あれ？私何の話してるんだっけ？」

検事「ほらもう自分で混乱してるじゃん！もう服の話やめよう！被告人の汗が出て  
るんだから普段裸とか関係ないし！」

弁護士「え……?じゃあ……こしばらくのくだり全部無駄じゃん」

検事「最初からずーっと無駄だよ！あなたどうしてそんなに足掻くの!？」

弁護士「負けるわけにはいかないんです！異議あり！」

検事「言ってみなさい！」

弁護士「もうちょっと考えます……」

検事「このパターンあったな！今思うとまだ平和だったわ！」

弁護士「もうとにかく長引かせて勝機を見つけるしかない……!？」

検事「面倒臭いなもう……、そろそろ帰らせてくれない？」

弁護士「あ、検事さんが今後1年間私に毎月8万貸してくれるならすぐやめますよ!？」

検事「ついに買収!?」  
弁護士「違います! 借りるだけです! ☒裁判とは関係ない話だし!」  
検事「裁判では裁判と関係ある話をして!」  
弁護士「確かに個人的な話で申し訳ないですけど! 貸してくれるならすぐ諦めますから!」  
検事「……まあ、返すなら別にいいけど?」  
弁護士「え!?!」  
検事「この裁判に勝ったらボーナス出るし」  
弁護士「この程度で!?!」  
検事「いやあなたあのせいでかなり大変な仕事になってるよ!」  
弁護士「まあとにかく貸してくれるんですね? じゃあ裁判長、判決お願いします」  
検事「やっとな終わるよ……」  
弁護士「足跡と服は完璧に論破しましたが指紋だけはアレなんで有罪でいいです」  
検事「その小さな意地やめろ!」

## 8 新種発見! ペクチョンの生態

新種の動物を発見しました  
馬にそっくりですが決定的な違いはその体臭です

全身からまるで世界中の絶望をかき集め肥溜めで煮しめたような臭いを放ち特に耳の裏は嗅げば中3より前の記憶が全部ぶっ飛びほど衝撃的一度触れたら臭いがDNAまで浸透し子々孫々まで消えることはないでしょう私は現在臭いを理由に日本への入国を禁止され現地で難民申請をしています彼らは非常に懐きやすくて飼育も簡単なので可愛がってやってください餌は生牡蠣です

## 9 透明人間になる理論上最悪のタイミング

P「パイロット」「エヴァンガイン初号機、地上到達。オペレーションルーム、目標の位置を教えてください」  
O「オペレーター」「三時の方向に人型怪物が二体。七時の方向に四足歩行型が一体よ」  
P「どっちを狙えばいい?」  
O「まずは四足歩行型。奴らは素早いわ。これ以上ここに接近させないように細心の注意を払って!」  
P「ラジャー。移動する」  
O「頼んだよ。怪物がこのセントラルテンブルに接触した途端、サードビッグバンが発生し、人類は滅亡してしまうの……!! 世界の命運はあなたにかかっている」  
P「安心して。私を誰だと思ってるの」  
O「あ! 敵から高エネルギー反応! 砲撃に警戒して!」  
P「了解! アトラクタフィールド展開!」  
O「発射された! で、デカイ……っ!」  
P「うおおおおおおおっ!」  
O「お願い! 耐えて!」  
P「こんなもの……、私の敵じゃないわっ!」  
O「あ、あっさり弾き飛ばした!?!」  
P「フフッ……、これが私の実力よ」  
O「さすがね……。エヴァンガインの出力はパイロットとのシンクロ率に依存する。そしてあなたは脅威の○○○○という数字を叩き出した天才パイロット……! 理論上有り得ないとされるほどのシンクロ率から、神の悪戯の異名を取る女……!」  
P「そんなに褒めないですよ。さ、今度はこちらから攻撃と行きましょう」  
O「……ま、待って!」  
P「どうしたの?」  
O「こちらのモニターに写っているコクピット内の映像からあなたが消えた!」  
P「何言ってるの? 私はここにいるわよ? 初号機も問題なく動かせるし」  
O「どういうこと? さっきの敵の攻撃の影響なのかな」  
P「いえ、完璧に防いだはずよ……あっ、そ、そうか!」  
O「何か分かったの!?!」  
P「……半年前のことよ。私初詣に行った神社で、『透明人間になれますように』と願ったの」

○「はあ」  
P「それが今叶ったみたい！」  
○「こんなタイミングで叶うな！」  
P「私だってびっくりよ！ねえ、これ考えうる最悪のタイミングじゃない？」  
○「本当にね！なんでもよりによって人類の存亡をかけて巨大ロボに載ってる時に透明人間になるの！」  
P「知らないよ！何なのこの奇跡！あれ？タイミングが奇跡なのかそもそも願いが叶ったのが奇跡なのかどっち？」  
○「どっちでもいい！異常事態だけど今は置いとこう！戦いに集中するの！」  
P「今後私の神の悪戯、という異名はこの件を指すことになりそうで嫌なんだけど！」  
○「そうかもしれないけど今は気にしないで！」  
P「そ、そうね。しかしもったいないわね……。今の私は見えても見えなくても完全にどっちでもいいのに……」  
○「余計なこと考えてないで戦って！」  
P「無駄話している間に敵を見失った！どこ？こっち？」  
○「こっちってどっち!?!」  
P「指差してるでしょ！」  
○「見えないんだよ！」  
P「何にも得してないのに支障は始めた！どうせならエヴァンガインごと透明になればいいのに！」  
○「エヴァンガインはガッツリ見えてる！」  
P「本当に無駄な奇跡だなこれ！それもシンクロしてよ！」  
○「四足歩行型は5時の方向だよ！落ち着いて！あなたならなんてことない敵だよ！」  
P「了解！さっさと片付けて早くここを出たい！この透明な体を活かして色々……」  
○「こら！邪念を持つちゃダメ！」  
P「な、何？急に初号機の動きが鈍ってきた」  
○「シンクロ率が急激に低下してる！エヴァンガインは『怪獣を倒したい』という強い意志に反応して動くの！『透明人間になったことを活かしたい』という意志に飲み込まれないで！」  
P「しっかり支障出てるな!?やっぱタイミング最悪だ！」  
○「透明になっていないことは忘れて！気にしないで！」  
P「体が突然透明になっても気にならない奴がいるなら見てみたい！」  
○「突然も何もあなたが願ったんでしょ！何で透明になるうなんてと思ったのよ！」  
P「泥棒し放題だと思って！」  
○「自爆装置作動！」  
P「ごめんって！私だって本気じゃなかったのよ！まさか本当に叶うなんて思わないでしょー！」  
○「くたばれ！」  
P「謝ってるのに厳しいな!?私がかたばったら人類が減びること忘れないですよ！」  
○「じゃあさっさとあの四足歩行型を倒して！」  
P「喋ってる間に倒した！」  
○「優秀は優秀なのかよクソが！」  
P「何で優秀なのに怒られるのよ！」  
○「次は人型の二体！でもあなたのような社会悪を透明のままコクピットから出すわけにはいかない！透明化が解除されるまで待ってから倒して！」  
P「そんな悠長なこと言ってるるか！怪獣がセントラルテンプルに接触したらサードビッグバンが発生するんだよ!?!」  
○「じゃあ一匹を普通に倒して二匹目と差し違えて！」  
P「死なすな！私エースパイロットなんだよ!?!落ち着いてよ！私実際には泥棒なんて絶対にやらないから！どうして信じてくれないの!?!」  
○「あなたが『泥棒』というワードを放つたびにシンクロ率が落ちていくからだよ！」  
P「なんて嫌なロボットなんだ！そ、それは私の無意識的な部分に反応しているだけであって、私にはちゃんと理性があるから！」  
○「どうだかね」  
P「もう、あんただって透明になったら絶対に邪心が生まれるはずなのに……」  
○「な、何!?私の体が透明になり始めた！」  
P「え!?!」  
○「私に何をしたの！」  
P「わ、分かんない。もしかしたら『あなたに私の気持ちを分かってほしい』という願いをあの神社の神が叶えてくれたのかも！」  
○「余計なこと願うな！神様も余計なことしないですよ！」  
P「私もこっちの願いだけですぐに叶えてくれたことに多少の不满がある！」  
○「い、一旦忘れよう。私が透明かどうかはこの戦いに一切関係ないから」

P「本当に無駄な奇跡ね」  
O「……痛っ！ すいません、この席は私が座ってるんで隣使ってください」  
P「そっちも地味な支障が出てない!?」  
O「だ、大丈夫！ さあ早く人型を倒して！」  
P「そ、それが、エヴァンガインの動きが悪い……！」  
O「邪念を捨てろって言うてるでしょ！」  
P「そんなこと言われても……！ あ、あんただって今なら分かるでしょ！」  
O「……オペレーシヨングルームより全隊員に到達。みんな今すぐ自分のお財布を隠して！」  
P「な、なんて自制心と理性の強い女なの……！ まさか見たいと思っていた『体が突然透明になっても気にならない奴』が本当にいるなんて」  
O「見れないけどね」  
P「透明人間ジョーク出せるの早くない!?」  
O「さあまず2時の方角にいる奴から！ 早くして！」  
P「ダメだ……！ 完全に動かなくなった！」  
O「ええ!？」  
P「私は泥棒と言ったらレジのイメージだったのに！ あんたが財布という新たな可能性を提示したせいで邪念が強まったみたい！」  
O「可能性を提示した覚えはないよ！ いい加減にして！」  
P「私だって実行する気はないんだって！ 誰かあの神社に行って私を透明じゃなくしてと願ってきて！ あの神社は本物よ！」  
O「このままじゃ人類滅亡の原因はあなたの泥棒願望になるよ！」  
P「最悪過ぎる……っ！ でもダメだ！ 全く動かない！ 他のパイロットはいないの？」  
O「全員前回の戦いで怪我しちゃったの！ あなたしかいない！」  
P「じゃああんたが乗って！」  
O「私!? 私は搭乗訓練を受けていないもん！」  
P「何とかなるよ！ あんたほど邪念のない人間はいないんだから！」  
O「……分かった、任せて！ 転移装置を使って私とあなたを入れ替える！」  
P「お願い！」  
O「……ちよ、ちよと待ってください！ 私まだ転移装置に乗ってません！」  
P「また支障出てない!?」  
O「だ、大丈夫！ 転移装置、起動！」  
P「……あ、ここはオペレーシヨングルーム……。そっちは転移できた？」  
O「ええ。ほら、ここにいるのが見えないの？」  
P「透明人間ジョークやめろ！ 手元のモニターにシンクロ率が出ているはずよ！ 何%？」  
O「47%」  
P「ガッツリ高いパターンかと思ったらそこそこね！」  
O「単に私にパイロットの才能がないんだと思う」  
P「本当に嫌なロボットだな！」  
O「でもある程度は動くみたい！ 私には戦闘経験がないから不安だけど……」  
P「安心して！ 喋りながらあと一息で倒せるとこまではやっとならから！」  
O「本当に優秀は優秀だな！」  
P「……あ、よく見たらもう動いてくれない？ 倒してるわ」  
O「ねえ！ 私に才能がないのが露呈しただけなんだけど！」  
P「まあいいじゃん、無事に怪獣を倒し切ったんだから」  
O「……そうね。あ、せっかく乗れたからちよっといいい？」  
P「何？」  
O「例の神社を踏み潰してくる」  
P「2時の方向よ！」

10

メカメカレストランに寄せられるよくある質問

おいでよ、メカメカレストラン

君を待ってるよ

え？どんなレストランが分かんない？

じゃあ質問してね！

Q「店員は？」

無慈悲の殺戮兵器・PG8だよ

料理より拿捕と哨戒が得意だよ

射撃時に装甲に不自然に熱がこもる不具合を

巧みに調理に利用するよ

○2.店内は？

壁にズタズタのシャケが飾られているよ  
「迷惑客はこうだ」というメッセージさ  
誤解しないで！PG8はそんな残酷な奴じゃない  
手が付けられない試作型・7G7の仕様や

○3.お料理は？

腰が抜けるほど美味しいけどキッチンで  
液漏れの魔術師・PG6が踊っているよ  
PG7に追加で8000円払えば  
食べる前3分祈る権利をもらえるよ

おいでよ、メカメカレストラン  
君を待ってるよ  
1から5は流石に廃棄したから  
安心してね！

11

カッパ君はおでかけしたい

おでかけしたいな  
もう退屈さ  
やっぱり自由がいいな

おでかけしたいな  
外は楽しい

ああ早く抜け出したいよ

ああこの刑務所から

おでかけしたいな  
おでかけしたいな  
また老人騙してお金稼ぎたいな  
今度は捕まりたくないな

おでかけしたいな  
おでかけしたいな  
奴ら身体に良いと言えばゴミでも買うから  
ありがたがって買うから

おでかけしたいな  
いつまで続くんだろう  
まああと8年半なんだけとさ  
おでかけしたいな  
おでかけしたいな

あ、でも他の囚人から歯磨き粉を盗んだ罪で  
2年延びたんだった

12

神々の諍い　　水の神 VS 海の神

水の神「おい、海の神」

海の神「何だ？水の神よ」

水の神「話がある。大事な話だ」

海の神「話せ」

水の神「私は水の神だ」

海の神「知っている」

水の神「お主は海の神だ」

海の神「そうだ」

水の神「……被っていないか？」

海の神「……確かに」

水の神「私は海も含めて全ての水を司る神だ。お主は必要か？」

海の神「必要だ」

水の神「何故だ？」

海の神「私は海に暮らすあらゆる生命の守護をも任されているからだ。お主は単に水だけだろうか？」

水の神「いかにも」

海の神「逆にお主の仕事は何だ？海の水は私のもの。であれば川の水か？」

水の神「いや、それは川の神のものだ」

海の神「お主の水はどこにある？お主こそ必要か？」

水の神「確かに直接水を持っておらぬが、お主に託した水を総合的に管理している

上位の存在、それが水の神なのだ」

海の神「肩書きは立派だが実際に何をしているのかはわからない胡散臭い存在と

いうことで良いか？」

水の神「私をエクゼクティブ・プロデューサーのように言うな」

海の神「…考える必要があるな。このままでは人々を混乱させる」

水の神「いかにも。例えば海で遭難した人々はどちらに祈ればいいのだ？」

海の神「私だ。私なら海流を操作することも食料となる魚を用意することも可能な

のだ」

水の神「いや、私だ。海流の操作なら私にもできる。お主と違って雨を降らし飲み水

を提供することも可能だ」

海の神「つまり基本は私に祈り、飲み水に関してはお主に別途手続きをする必要が

あるということか？」

水の神「基本私に祈り、食料に関してはお主に別途手続きをするという捉え方もあ

る」

海の神「複雑だな」

水の神「市役所のようなだ」

海の神「では、人々が海に原油をぶちまけし時の掃除はどうする？」

水の神「そんな汚いことはやりたくない。お主の管轄だ」

海の神「私もやりたくない。お主の管轄だ」

水の神「完全に市役所だな」

海の神「これがたらい回しか」

水の神「似たような存在がいれば責任の所在が曖昧になる。それゆえ人々は混乱し、

我々も押し付け合う。1つに統一すべきではあるまいか」

海の神「その通りだ」

水の神「勝負で決めよう。どちらが残るか」

海の神「良いだろう」

水の神「負けた者は他の神に変更だ」

海の神「承知した。何で戦う」

水の神「かけっこだ」

海の神「良いだろう」

我ら神 偉大な神

人々よ我らを崇めよ

我ら神 偉大な神

互いが互いを許せぬ

水の神「地球を一周だ。ここを起点とし、また、終着点とする」

水の神「承知した」

水の神「では、構え」

水の神「待て。場所を代われ」

水の神「何故だ？」

海の神「地球は、球だ」

水の神「いかにも。今更何を言う」

水の神「故に、赤道の近くを回る方が距離が長い」

水の神「確かに。だが誤差だ」

水の神「人々にとっては尋常ならざる距離だ」

水の神「お主はか弱き哀れな人か？」

水の神「否。偉大なる神なり」

水の神「では誤差だ」

水の神「謀ったな」

水の神「愉快だ」

海の神「始めよう」

水の神「承知した。では、私が合図をする」

海の神「私だ」

水の神「また対立か」

海の神「始まらぬ」

水の神「他の存在に任せよう」

海の神「誰にだ？」  
水の神「あそこにいるオランウータンが尿を垂れし時にしよう」  
海の神「神への合図が尿であってたまるか」  
水の神「ではあの火山が噴火せし時はどうか」  
海の神「かけっこの合図にしている場合か。人々を助けよ」  
水の神「確かに。我々は神だ」  
海の神「日が昇りし時にしよう」  
水の神「平等だ」  
海の神「では構え」  
水の神「…行くぞ！」  
海の神「負けぬ！」  
水の神「な、何と」  
海の神「どうした？」  
水の神「躓いた。エベレストめ」  
海の神「大丈夫か？」  
水の神「膝をすりむいた」  
海の神「哀れな」  
水の神「血が出た」  
海の神「これを貼っておけ」  
水の神「これは何だ？」  
海の神「ニュージールランドだ」  
水の神「ちよとど良いな」  
海の神「あとで戻しておけよ」  
水の神「承知した」  
海の神「では、開始！」  
水の神「承知！」  
海の神「魚たちよ！奴を妨害せよ！」  
水の神「何？ぬ、ぬぬ。足にまとわりつく」  
海の神「愉快だ」  
水の神「卑怯な。ならば、海水よ！奴を打ちのめせ！」  
海の神「無駄だ。海水は私にも操れる」  
水の神「ぬぬ」  
海の神「地表の7割は海。この勝負、そもそも私が有利なのだ」  
水の神「…それは間違いだ。川よ！猛毒となれ！」  
海の神「何？」  
水の神「これで魚は全て死ぬぞ」  
海の神「さ、魚よ！」  
水の神「愉快だ」  
海の神「神のすることか」  
水の神「早く河口に行け。手で押さえておかないと海に流れ込む」  
海の神「ひ、ひとまずガンジス川か」  
水の神「私は先に行く」  
海の神「許さぬ」  
水の神「構わぬ」

我ら神 偉大な神  
人々よ 我らを崇めよ  
我ら神 偉大な神  
互いが互いを許せぬ

海の神「ぬ、ぬぬ。どうすればよい？土を集めせきとめたとして、地上に水が逃げるだけ。人々が死ぬ」  
水の神「もはやどうしようもないのだ。負けを認め私に許しを請え。さすれば川の水を元に戻そう」  
海の神「そうはいかぬ。…よし、その人間。ノア、お前だ。船を作って避難せよ」  
水の神「何？」  
海の神「他の奴らは全滅させる。お前とその家族だけでも生き残れ」  
水の神「思い切ったな」  
海の神「誰のせいだ」  
水の神「だがもう遅い」  
海の神「遅くはない。必ず追いつく」  
水の神「ぬ、は、速いなお主」  
海の神「当然だ」  
水の神「気を抜けぬな。ぬ、おい、待て」

海の神「何だ？」  
水の神「我々が暴れているせいで地球が動いている」  
海の神「何の問題がある？」  
水の神「太陽から遠くなり、地球が氷河期となる。皆死ぬぞ」  
海の神「とうに死んだ」  
水の神「ノアまで死ぬ」  
海の神「死ねばいい」  
水の神「落ち着け。熱くなりすぎだ」  
海の神「どうせ我々が裏側を走る際に元の位置に戻るであろう」  
水の神「ぬ、確かに」  
海の神「愚かな」  
水の神「何だと？」  
海の神「所詮はオランウータンの尿の神か」  
水の神「水の神だ。殺すぞ」  
海の神「荒いな」  
水の神「許さぬ」  
海の神「負けぬ」  
水の神「私はすでに裏側に到達した。お主は負ける」  
海の神「なんの。まだ半分だ」  
水の神「だが手はあるまい」  
海の神「ある」  
水の神「何だと？」  
海の神「お主、私が海水と魚しか操れぬとっているだろう？」  
水の神「ぬ、違うのか？」  
海の神「私は海底火山をも操れるのだ」  
水の神「な、何だとう？」  
海の神「食らえ！」  
水の神「な、何！？突如海底より火山が隆起し、それに躓いて転んでしまった！」  
海の神「ハワイと名付けよう」  
水の神「おのれハワイめ」  
海の神「すりむいたか？」  
水の神「血が出た」  
海の神「台湾でも貼っておけ」  
水の神「もう少し細長いものが良い」  
海の神「ではチリだ」  
水の神「長いが細すぎる」  
海の神「好きにするが良い。私は先に行く」  
水の神「ま、待て」  
海の神「待たぬ。死ね」  
水の神「荒いな」  
海の神「互いにな」  
水の神「……止むを得ない。私も奥の手を出そう」  
海の神「何だと？」  
水の神「お主、私が水しか操れぬと思っっているだろう？」  
海の神「ぬ、違うのか？」  
水の神「いや、その通りだ。だが、この星のありとあらゆる存在は多くの水を含んでいる。例えば人間なら7割は水だ」  
海の神「ということか」  
水の神「その通りだ。だが7割程度ではあまり思ったように動かぬ」  
海の神「ほぼ全滅させたしな」  
水の神「構わぬ。もっと水分の多いものがある。私はそれを操ればいい」  
海の神「何を操る？」  
水の神「きゅうりだ」  
海の神「な、何！？無数のきゅうりが山となり私の行く道を塞いで行く！？」  
水の神「富士山と名付けよう」  
海の神「おのれ富士山め」  
水の神「これで勝負は決したな。もはや終着点は目の前」  
海の神「な、何と！ま、負けてたまるか！」  
水の神「もう遅い。ははは、終着だ！私の勝利である！」  
海の神「ぬ、ぬぬ。何ということだ」  
水の神「哀れだな。お主はもう海の神ではない。さらばだ」  
海の神「……であれば、後片付けは任せて良いか」  
水の神「……散々荒らしてしまったな」  
海の神「互いにな」  
水の神「……やはり今まで通り2人で君臨するとしよう。後片付けはお主の管轄だ」



海の神「いや、お主の管轄だ」  
水の神「市役所のようにだ」  
海の神「これがたらい回しか」  
我ら神 偉大な神  
人々よ我らを崇めよ  
我ら神 偉大な神  
互いが互いを許せぬ

13

メロスは激怒した。だからカニを与えた(あ子 REMIX)

クレジット

詞&曲

ミックス&マスタリング

ジャケットデザイン

キャラクターデザイン

編曲(Track13)

調音(Track10)

ボーカル

タカハシヨウ  
タカハシヨウ  
タカハシヨウ  
竜宮ツカサ

あ子  
才能

初音ミク(Track6,10)  
GUMI (Track11)

小春六花(Track3,4,5,7,12)

夏色花梨(Track2,3,7)

花隈千冬(Track8,12)

小春六花(Track3,5,7,9,12)


夏色花梨(Track3,7,9)

花隈千冬(Track12)

キャスト

スペシャルサンクス

合同会社TOKYO6 ENTERTAINMENT  
有限会社ジャンゼン

- 
01. クワガタにチョップしたら死んだ
  02. 【急募】この状況から助かる方法 / 夏色花梨
  03. 骨肉のコント / 小春え花 & 夏色花梨
  04. 鈍色の空から / 小春え花
  05. え花監督は脚本家に逃げられました / 小春え花
  06. メロスは激怒した。だからカニを与えた。 / 初音ミク
  07. 法逆かき浪せん / 小春え花 & 夏色花梨
  08. 新種発見! ペクチヨンの生態 / 花隈千冬
  09. 透明人間になる理論上最良のタイミング / 小春え花 & 夏色花梨
  10. メカメカレストランに寄せられるよくある質問 / 初音ミク
  11. カツパ君はおでかけしたい / GUMI

bonus track

12. 神々の詩い ~水の神VS滄の神~ (REMIX) / 小春え花 & 花隈千冬
13. メロスは激怒した。だからカニを与えた。(あ子REMIX)